

シリアの牧畜社会の変容と資源管理

第4回：規則的遊動パターンの成立と山地草原植生への人為圧

本シリーズでこれまでとくに説明をくわえずに「資源」という言葉を繰り返して用いてきた。ここでいう資源が何をさしているのかをすこし明確にしておきたい。資源とは、まず住民共同体との濃密で直接的なやりとりを前提とした集落ないし活動域周辺における自然である。この自然は農耕や牧畜を営むうえで不可欠な基盤となる身近な土壌、水、草原、森などをさす。またときに生業の補助手段として、あるいは本業としての採集・狩猟(漁撈をふくむ)の対象ともなる。日本の農山魚村で生活の糧、すなわち生活資源として重要な役割を果たしてきた里山の自然もここでの資源という意味合いにちかい。当該住民にとってはこの自然は直接の生活資料となると同時に現金収入の限られたなかでの生活保障の役割を果たしてきたとみられる。他方、工業化による圧倒的な資金力、購買力を背景に地球規模で大量輸送、大量循環される石油、鉱物、エネルギー、飼料用穀物、食糧などの「資源」は一応次元の異なる事項として区別して取り扱うこととしたい。

前号でみたとおり、春季においてジャジーラに残された唯一まとまった草資源としてアブド・アルアジズ山地(以下、AA山地)の重要性が急速にクローズアップされてくることになった。ハサケ農業開発の動きのなかで牧畜民全体の関心が春季に不足する資源獲得という目的でいきなりAA山地に向かいだした格好である。ここに夏季～秋季の平原部利用と春季のAA山地利用とのあいだに新形式の季節往復移動が成立した(冬季は各集落周辺での利用が基本となる)。このように飼料資源の季節的・地域的な新たなる偏在に対して、牧畜民はその柔軟性および進取性をいかに発揮して変容した環境へとしたたかに適応していった。そして、その気質を支えたのが彼らの遊動性ないし非定住性であったと筆者は考えている。この稀少で偏在する乾燥地資源をめぐる牧畜民の適応戦略としての遊動文化についてはAAI News No. 45 でふれておいた。

しかし、春季のAA山地への家畜群の集中化は、ひとまずいたずらに無制限・無軌道な利用にはいたらなかった。Baqqara al jabal の5～6支族単位による半定住集落の分布や支族間割り当てによる山地の使い分けという社会規範に由来する放牧地利用規制がはたらくことで外部牧畜民による遊動パターンについても一定の規則性を最初から有していたからである。また資源利用面からみるならば、AA山地において放牧だけでなく、もうひとつの利用圧力が草原に対して存在している。それは牧畜民がパン焼きのための燃料集めを草原植生の優占種である shrub 類におおきく依存し、薪採取圧というファクターがたえず草原に対してかかっていることによっている。さらに詳細にみていくと放牧地選択とやらんで民族植物学的に興味ぶかい牧畜民による shrub 類の選びわけという現象が認められる。こうしてAA山地の草原植生は放牧と薪採取という2つの人為圧をたえず受けつづけてながらも、支族間の社会経済的なすみわけや資源利用における嗜好性ないし選択性から、彼らの定住化の過程をとおして、非常に規則性をもった利用パターンができあがってきたとみられる。今回は、この方向性をもった人為圧によってしだいに変化して成立したAA山地の配列的草原植生を紹介する。



山地草原からの shrub 採取風景



口バに薪を積みあげ家へと運ぶ



タンノールかまどで焼かれるパン